

# 書評

石川巧著

## 『高度経済成長期の文学』

瀧田 浩

本書の著者石川巧氏・藤井淑禎氏・渡邊正彦氏・私瀧田浩の四人で、二〇〇五年度から二〇一一年度まで取り組んできた共同研究（学術振興会採択課題）の成果の一冊である（藤井氏は二〇一〇年度から共同研究のメンバーをはずれた）。著者と書評者は共同研究のメンバーであるが、時間を共有してきたアドバンテージは生かしつつ、あくまで批評的な立場から本書を評したいと思う。

研究課題である日本の高度経済成長期の文化をめぐることは、藤井氏は共同研究に取り組む以前から独自の研究を著書として世に問うて評価を得ており、四人の共編著の著作としては『高度成長期クロニクル』（二〇〇七年一〇月、玉川大学出版部）があるが、本書は、藤井氏以外のメンバーによる高度経済成長期の文化を対象とした、

初めての単著である。全十五本の論文のうち十二本が書かれたのは（目次の節題下に初出年を示した）、共同研究が始まってからである。石川氏の本領域をめぐる研究が共同研究の進行とともに深化・発展してきたことが確認できよう。

国文学研究資料館や国立情報学研究所の論文検索を使い、「高度（経済）成長（期）」で検索してみても、文学領域における研究はまだまだ少ない。このような研究状況において、石川氏の十五本の論考から成る本書が刊行された意義は大きい。以下に目次を示してから書評に移る。

### 序論

#### 第一章 知性―学生小説の変容

第一節 モラトリウム文学のはじまり  
―柴田翔『されど われらが日々―』  
論（二〇〇七年）、第二節 〈知性〉の変容―庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』論（二〇〇六年）、第三節 子規との対話―大江健三郎『他人の足』論（一九九四年）

#### 第二章 大衆―身につまされる文学

第一節 原爆とエロス―川上宗薫の自

伝的小説をめぐる（二〇〇五年）、第二節〈金の卵〉たちへのエール―松本清張『半生の記』を読む（二〇〇七年）、第三節 戯画としての合戦―吉川英治『私本太平記』論（二〇〇一年）

#### 第三章 欲望―愛慾の光景

第一節 妻たちの性愛―川端文学の水脈（二〇〇一年）、第二節 悶々とする日々への復讐―清張ミステリーの女たち（二〇〇九年）、第三節 同棲小説論―アパートのある風景（書き下ろし）

#### 第四章 事件―終末の記憶

第一節 三島由紀夫の死をめぐる一考察―『川端康成／三島由紀夫 往復書簡』を読む（二〇〇九年）、第二節 万博と文学―〈人類〉が主語になるとき（二〇一一年）、第三節 吉永小百合という記号―〈夢千代日記〉を読む（二〇〇八年）

#### 第五章 教化―教材化される文学

第一節〈私〉探しの文学―太宰治の読まれ方（二〇〇九年）、第二節 ヒューマニズムとコスモポリタニズム―教育言説のなかの有島武郎（二〇〇九年）、第三節 詩の反逆―辻征夫論（二

〇〇七年)

補助資料／初出一覧／あとがき／索引

いうまでもなく、高度経済成長期に書かれた作品は膨大で、それらについての研究も膨大である。少ないのは、(高度経済成長期とされる)一九五〇年代後半から一九七〇年代前半までの文学を、時代と切り離して論じたり、政治・社会・文壇の特定の出来事や動きに結びつけて論じたりするだけで済まず、十年／＼二十年というスパンで、生活意識の変容が文学・文化にあたえた影響を見いだそうとする研究である。章題となった、知性・大衆・欲望・事件・教化という五つの着眼点は、いずれもこの時代の大きな変容相をとらえるのに適したものだといえよう。

では、著者は、高度経済成長期における重要な変化を何に見いだし、それが文学にどのように作用したと考えているのか。十五本の論文はそれぞれの研究対象に即した問題設定と方法論の選択がなされており、通底する問題認識を端的に示す説明を取り出すのは簡単ではないが、「序論」において示される次の著者の認識は、本書全体の

基底にあると考えられる。

一九六〇、七〇年代といえば、学生運動や労働運動の風が吹き荒れた時代である。(略)人々を闘争に駆り立てる材料がいたるところにころがっていたし、実際、それぞれの当事者たちは激しい怒りと憎しみを鬱積させていた。だが、怒りと憎しみをもたなければならぬ人々の多くは、社会的・経済的な弱者だった。大量生産／大量消費の循環がもたらす「富」の恩恵によって、マジョリティは怒りと憎しみの現場から遠ざかることを許された。／また、「富」を享受することができた人々のなかには、困難に喘ぐ人々にも手をさしのべ、余った「富」を再分配することで自分の立場に正当性を与えたいという気持ちも芽生えてくる。そこには、怒りと憎しみをもたらす原因そのものは「忘れる」が、困窮している人々に手をさしのべる善意だけが保持されるような「やさしさ」の自己愛的な転倒が垣間見えるのである。

急速な経済発展にともなって新しく編成される社会構造の中で、豊かさを手にした大衆の多数が、他者への善意とやさしさを免罪符に、ブルジョアとしての階層的自覚や資本のシステムを忘却しようとする欺瞞に対する批判がここに見える。著者が撃とうとしているのは、戦中のナショナリズムや戦後の反ナショナリズムのイデオロギーを脱したのち、無自覚なままに「やさしさ」というイデオロギーをまとい、社会批判や社会運動から遠く離れて、豊かさを享受する大衆であろう。

本論の中で、このような批判が最も露出しているのは、第三章第三節「同棲小説論―アパートのある風景」の、以下の部分である。最後に書きおろされた論文に、「垂れ流す」「独善性」「稚拙な文章表現力」「手垢のついたコード」などの強い否定的評価が含まれているのが興味深い(ここで批判されているのは、三田誠広「僕って何」、見延典子「もう頬づえはつかない」、三石由紀子「ダイアモンドは傷つかない」である)。他者や現実と対峙する力をもたず、ただ「優しげ」である「僕」を主人公に配した小説、それに追従し、かつ女性に

よる性表象に対する読者の期待に迎合する  
かのような小説に対する著者の評価は厳し  
い。

このときの「僕」は、現実なるもの  
の手触りや他者の重みを丁寧に確かめ  
ることを厭い、自分が思うこと、感じ  
ることをただ垂れ流すだけである。そ  
の言葉遣いは慎重で優しげにみえる  
が、実際は、それをいつたらしめてい  
る。「傍点は原文」と思えることを語って  
しまうような独善性が垣間見えてい  
る。

実際、「僕って何」の直後には、同  
じ早稲田大学を舞台とした同棲小説が  
世評を賑わせることになる。「略」本  
来、作家「傍点は原文」とよぶにはあ  
まりにも稚拙な文章表現力しか持ち合  
わせていないそれぞれの書き手たち  
は、女性の側から語る同棲小説である  
ことを武器として、劇画「同棲時代」  
とまったく同じ手法でセックスや避妊  
を赤裸々に描く。愛するがゆえに傷つ  
け合う、という手垢のついたコードを

利用して、若い女性が語る同棲はどの  
ような光景なのだろうかという興味か  
ら小説世界に足を踏み入れる読者の期  
待を、最大限に引き受ける。

「僕って何」が発表されたのは高度経済  
成長期を過ぎた一九七七年であるが、高度  
経済成長期前期にあたる一九六三年発表の  
柴田翔「されど われらが日々——」を論  
じる、巻頭論文「モラトリアム文学のはじ  
まり」においても、社会の構造に目を閉じ、  
痛くも甘いノスタルジーに浸りながら豊か  
な生活を享受し始めた者たちに対する筆者  
の筆は厳しく、シニカルだ。著者はみずか  
らのイデオロギーによって文学作品を裁断  
したりはしないが、無意識のうちに採択し  
てそれを生きている読者のイデオロギーに  
強く揺さぶりをかけてくる。

この小説は、すでにそれが手の届く  
ところがないという喪失感ほど人間を  
充たしてくるものはない（傍点は原  
文）という逆説のテーゼとともに閉じ  
られるのである。

あの頃の自分といまの自分を対照  
し、記憶や回想のレトリックを駆使し  
て重層的な時間を表現するこの小説世  
界は、高度経済成長期の激変に身を任  
せていた人々の不安や虚しさを懐かし  
さに変換していくような仕掛けを内包  
しているがゆえに、同時代のベストセ  
ラーになったのである。

ここまで言及してこなかったが、本書の  
特徴の一つは綿密な調査である。注釈は量  
を誇ろうとするものではないが、松本清張  
の作家経歴の細部を補填する第二章第二節  
の注、被曝調査をめぐる第四章第三節の注、  
教科書や読書調査に関する豊富な情報がて  
いねいに整理された第五章第一節・第二節  
の注などは、それをもって一本の論文を編  
めるほどの質と量を兼ね備えている。この  
ように、丹念で精確な調査と冴えのある文  
体を武器に、郷愁をもつてとらえられがち  
な時代の像に対して、また、その時以来形  
成された生活の気分で生きようとする読者  
に対して、鋭く再考を迫る本書は批評的な  
価値を有している。

しかし、困難な問題を忘却しながら、豊

かな時代を鈍感に生きる自覚をもつ現代人のひとりとして、著者がつきつけてくる問題を私なりに再考する時、現代社会に身を置きながら、このような批判に正面から耐えうる生活は可能であるのかという疑問も浮かぶ。現代の彼岸から超越的になされる批判は、みずからの現実的な足場を忘却している点において、歴史的・社会的問題を忘却することと同じ程度に問題を孕むはずだ。

著者によって、現実や歴史を忘却するためのスイッチとみなされ、やさしさと地続きなものとして批判されそうな、人類という概念(第四章第二節)、私探し(第五章第一節)、ヒューマニズムとコスモポリタニズム(第五章第二節)などにも、評価すべき側面はあろう。人々が余裕ある生活をいきはじめの中で、少しずつこれらになじみ、共有し、やさしくなることにも意味や価値はあろう。私たちが実際に受けている時代の恩恵を過小評価することは、研究対象とした時代と論考執筆時期の近接性が可能にする、時代の証言としての本書の有効性を縮減してしまわないだろうか。

「あとがき」には私の疑問に答えるかの

ように、「大きな〈現実〉を喪失した私たちは、自分を歴史のなかに位置づけることを忘れてしまったが、そうした〈忘却〉というスイッチを補填する機能を担ったのが〈やさしさ〉という価値観だったのではないか」とある。本論を終えた時点で、著者による批判はみずからをも対象にしていることを読者に告白している。論考を紡ぐ過程においては記述者自身を対象化すること避けたと読み取ることができようが、それでもやはり、全体として、批判的に論じやすい時代の負の面を中心に書かれたという印象が残る。

性や嫉妬や絶望感など、個人の深部にあたる襲や屈折を取りあげる時、著者の筆は鋭く冴え、テキストの深度や強度が的確に炙り出される。時代や他者によりかからず、みずからの絶望や欲望、そして現実と対峙しうるか。著者はそこを見つめて、文学作品を評価しているように見える。「時代が変化し、豊かになり、生活が幸福に変わる」。高度経済成長期以後、一般的に共有されてきた、このような普通の認識に対して著者は懐疑的だ。「高度経済成長期の文学」と題した本書の主張のひとつは、時代が豊か

になることに比例して文学が豊かになったりはせず、むしろ、反比例して劣化することの危険性に警鐘を鳴らすことにあろう。高度経済成長期の正の面が一貫して軽視されている点は私にとって物足りないが、負の面に対する批評とその論証は的確である。後発の研究者にとって、大きな足がかりを提供する、ていねいな論考が十五本揃えられたと思う。

(二〇一二年二月 ひつじ書房 A6版  
五六四頁 本体六八〇〇円)

付記。二〇一二年八月一〇日に、本書の読書会を二松学舎大学で開催した。この稿を書くにあたり、レポーターを務めた住友直子氏、桂太郎氏、箕輪拓也氏、栗田卓氏、石井花奈氏、返町美里氏の報告に教えられたことがあることを付記しておく。

(たきたひろし 二松学舎大学教授)